

お の さ と

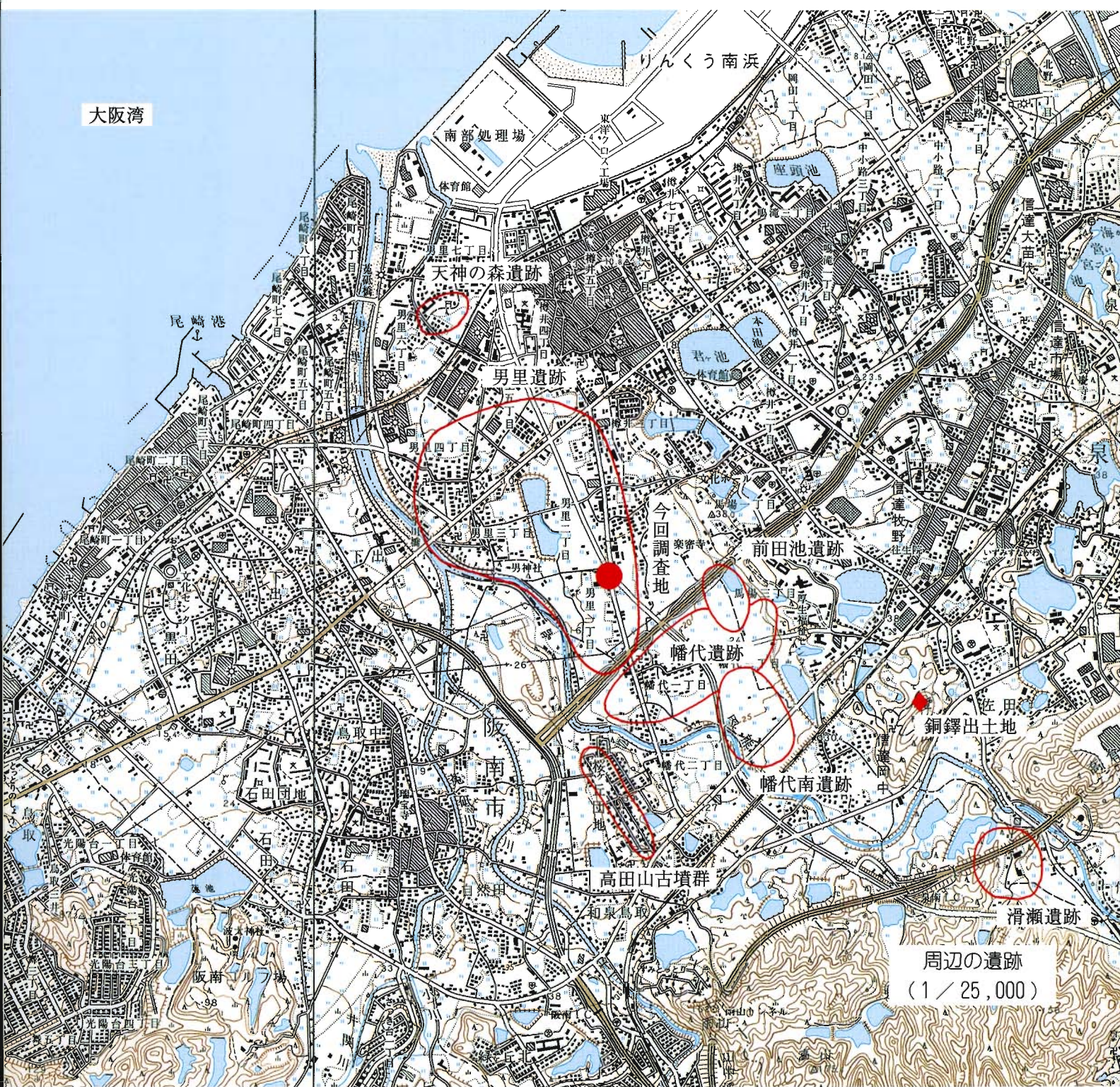
男里遺跡の調査



はじめに

男里遺跡は、縄文時代後期から中世の複合遺跡で、大阪府南部の泉南市男里・馬場・幡代に所在しています。男里川右岸にあたり、約1km×1.3km四方の拡がりをもつ遺跡です。昭和5(1930)年に遺物が発見されたことが契機となり、最初の調査が行われ、弥生土器や石器が確認されました。周辺の主要な遺跡としては、弥生時代では滑瀬遺跡(中期)、幡代遺跡・幡代南遺跡(前～中期)、古墳時代では天神の森遺跡(後期)、高田山古墳群(後期)などが知られています。また、調査地から約1.5km離れて現存する林昌寺の境内からは、泉南地域唯一の銅鐸が発見されています。

発掘調査は、主要地方道泉佐野岩出線(泉南岩出線)建設に伴い、実施しているものです。路線予定地のうち、男里遺跡の範囲内にあたる府道堺阪南線と国道26号線の間の部分を、平成4年度から断続的に調査を行っており、現在も継続中です。



男里の地名

男里の地名は、『日本書紀』や『古事記』に記載されている故事にちなんだものとされています。神武天皇東征の際に、流れ矢に当たって負傷した天皇の兄五瀬命が、血沼（茅渟）海（現在の大阪湾）を南下して山城水門（山井水門）に至った時、痛みに耐えかねて雄叫びしたため、「雄水門」と名付けたことが記されています。中世には、「男郷」「於雄郷」と表記されていましたが、江戸時代初期に「男里村」とされ、現在まで存続しています。周辺には「尾崎」「大苗代」「雄ノ山」などの地名がみられ、このあたり一帯が「おお」と呼ばれていたことがわかります。

遺跡の概要

男里遺跡は、今まで、当調査研究センターのほか、大阪府教育委員会や泉南市教育委員会によって、調査が行われており、多くの成果が得られています。遺跡の時代としては、縄文時代後期の土器が今回出土しており、最も古いものです。弥生時代では、中期後半の遺構・遺物がほとんどです。双子池周辺で、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構や遺物が多く確認されているため、この時期の集落が存在する可能性があります。奈良時代では、掘立柱建物などが検出されているほか、遺物も多数出土しています。中世では、鍛冶工房を伴う集落のほか、瓦類が多量に出土しているため、寺院が建立されていたことが考えられます。また、中世の真蛸壺焼成土坑が多く検出されていることも、大阪湾沿岸地域の地獄的な特徴といえます。

計画道路図



今年度の調査地点



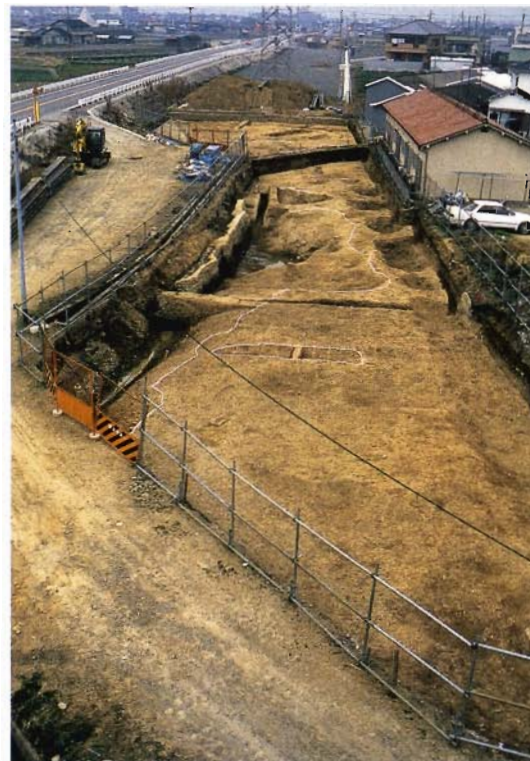
作業風景



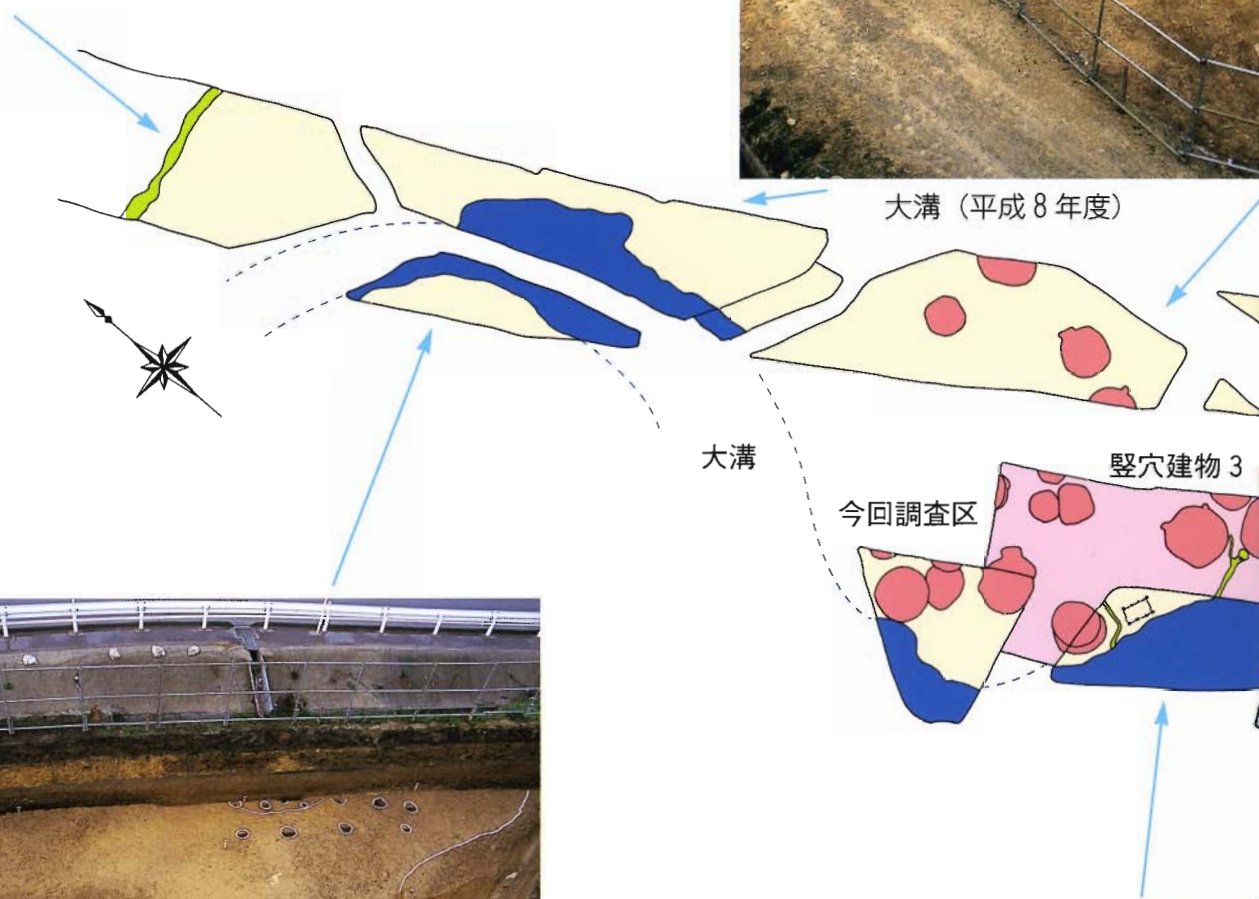
平板実測状況



蛸壺形土器出土状況（平成8年度）



大溝（平成8年度）



大溝（平成8年度）



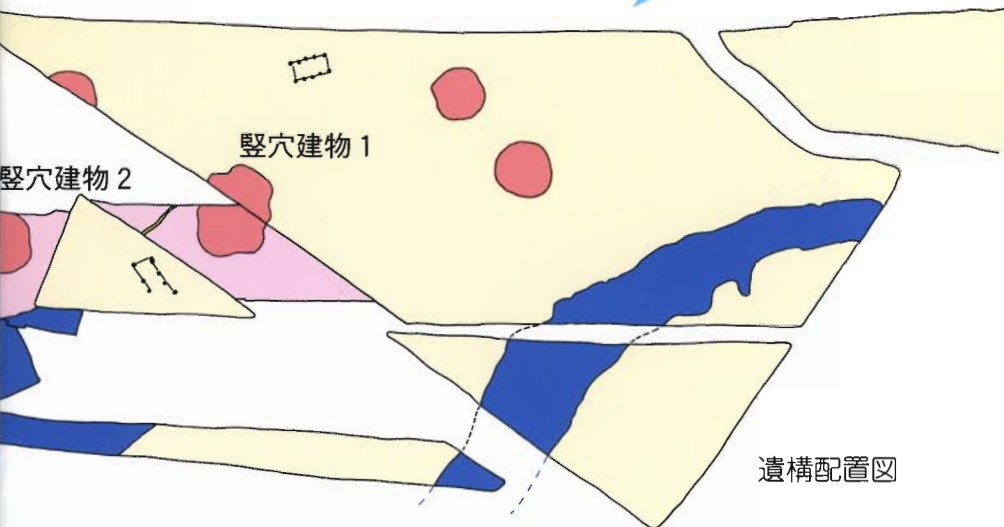
大溝



竪穴建物（平成7年度）



竪穴建物 検出状況（平成5年度）



遺構配置図

0 50m

大 溝

集落の西側は、金熊寺川（男里川）の低～中位の段丘面にあたり、今回の調査地点の西側隣接部分と北約80mの地点で、比高差1m以上の段丘崖を確認しています。西側の段差はややゆるく、徐々に下がっているのに対し、北部分の段差は急に下がっています。この段丘崖に沿う形で、幅約10mの大溝が確認されました。浅い谷状の自然地形などを利用して、人為的に大溝を掘削している可能性があります。大溝からは、かなり大量の土器が、廃棄された状態で出土しました。



（平成7年度）

弥生時代の集落

集落は、金熊寺川（男里川）を望む沖積段丘上に営まれています。調査は、集落の南西部分を縦断するかたちで行われているため、居住域の南側部分の規模を、推定することができました。

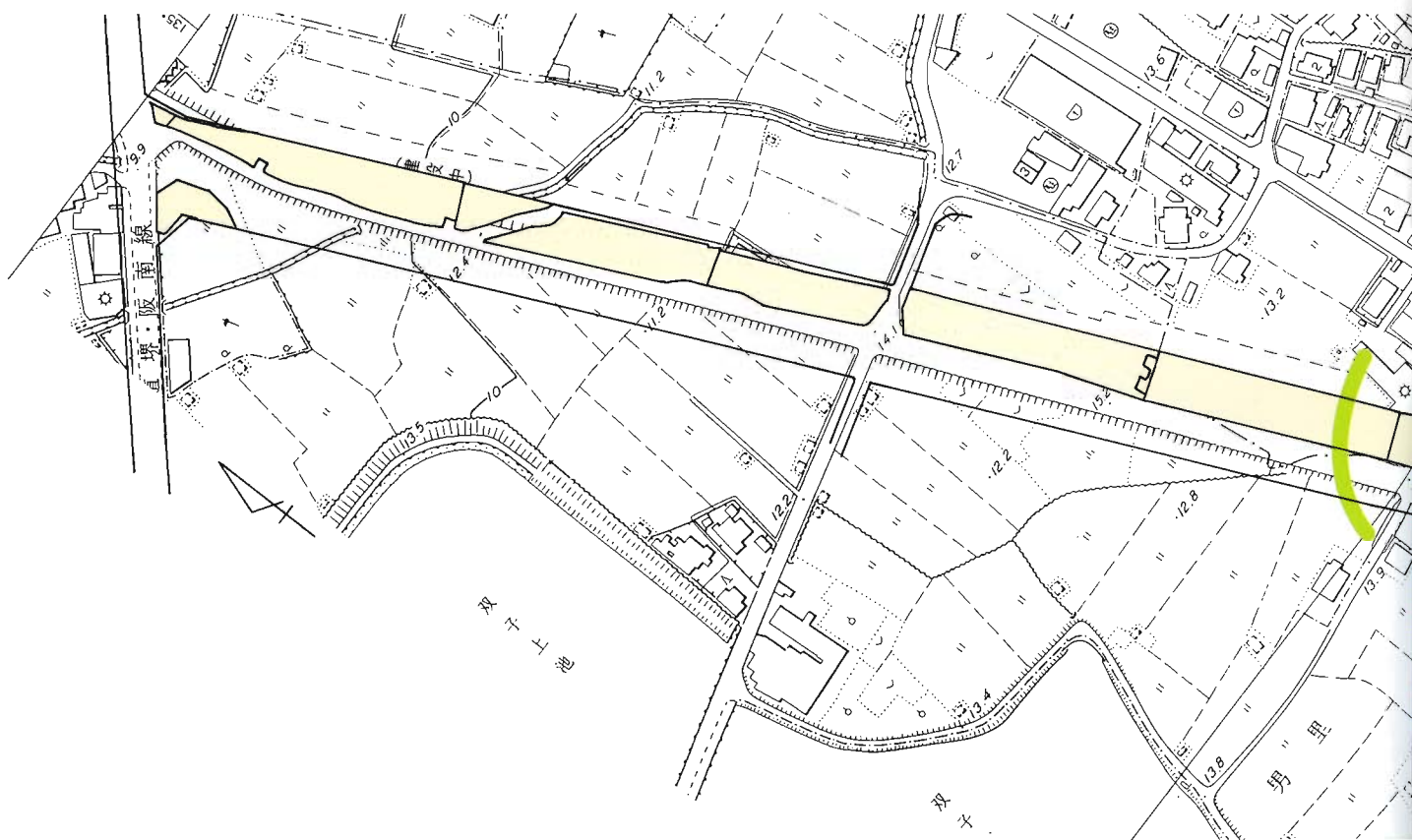
東西方向の小規模な溝が検出されており、これを境に北では^{たてあな}竪穴建物がみつかりません。南側では、南東から北西に延びる溝やほぼ南北方向に延びる河岸段丘崖が確認されています。この溝の南では、竪穴建物は検出されていません。今まで発掘調査が行われていないため、集落の東限ははっきりしませんが、現在の地形から推定することがある程度可能です。これらを総合すると、集落の居住域は南北約300m、東西200m以上の規模であることが考えられます。検出された竪穴建物は、累計で計20棟以上（今回の調査で11棟）になりました。径約8 mの2棟の大型竪穴建物（竪穴建物2・3）には、2棟の間から西の大溝へ延びる排水施設と考えられる溝がみられ、2棟でなんらかの単位を構成しているようです。この大型竪穴建物の北には、空間地が認められ、さらに北には建て替えや重複した竪穴建物が密集して、また別の単位を構成しています。この単位間の空間地をたどると集落内の道のようなものが復原できます。



竪穴建物 検出状況（平成7年度）



竪穴建物（平成7年度）



集落に伴う墓域

居住域から南東へ約300m離れた地点で、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓が2基検出されました。^{おのさといせき}男里遺跡では、初めてみつかったものです。1基は、調査区内で約半分を確認しました。規模は、約9m×7m、周溝の幅1～2mで、盛土はほとんど残っていません。中世の整地によって盛土が削平されているため、主体部は確認できませんでしたが、周溝内からは、^{とってつきつぽがめ}ほぼ完形の把手付壺と甕が出土しました。これらの土器は、盛土上に置かれていたものと考えられますが、周溝からは他に遺物は出土していません。また、この方形周溝墓から北西のところでも、完形の^{みずさしがたどき}水差形土器などが出土した溝が検出されており、2基目の方形周溝墓の一部と考えられます。まだ、2基の周溝墓を検出ただけで全容はわかりませんが、この地区に方形周溝墓を主体とする墓域が広がっていることが考えられます。

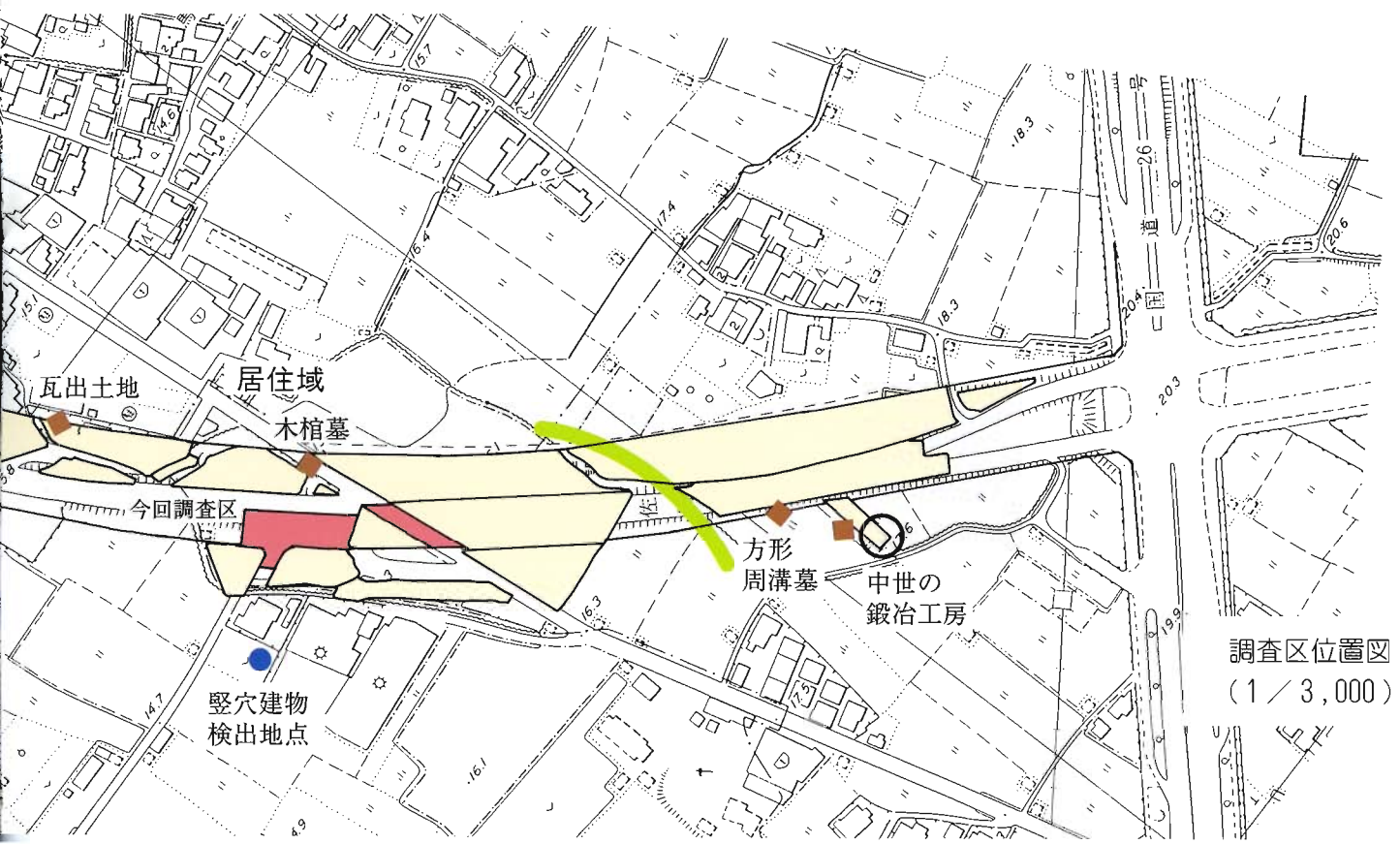
また、今までの調査で、今回の調査地点に近接した部分で、^{もっかんぼ}木棺墓が数基検出されており、この集落に伴う墓域が2ヶ所確認されたことになります。



方形周溝墓（平成11年度）



周溝内土器出土状況（平成11年度）



調査区位置図
(1/3,000)

竪穴建物の構造

今回の調査で、竪穴建物の上屋構造は一様でなく、違いがあることがわかりました。平面形が円形や隅丸方形、大型や小型、壁の有無などの違いが確認できます。

一例として、竪穴建物1は、平面形が一辺約10mにも及ぶ大型の隅丸方形で、はじめに大きく隅丸方形に竪穴を掘削し、その中に円形の溝による区画をつくり、その溝に沿って、径約4cmの木杭を約30～40cm間隔で打ち込んでいることが確認されました。また、竪穴建物2・3でも、幅約10cmの壁溝の中から、同様に径約4cmの木杭の痕跡がみつかっています。

この木杭を縦木舞^{たてこまい}と考えた場合、土壁が立ち上がっていたものと推察できます。また、板材や編物などを固定する支柱と考えた場合、これらを内装材として壁をつくり、土留めをした木杭の可能性が考えられます。竪穴建物で、壁構造が確認できる調査例はまだ少なく、貴重な成果であるといえます。



竪穴建物復元案



竪穴建物 1



壁溝内木杭検出状況（竪穴建物1）



木杭断面（竪穴建物1）

男里遺跡の調査 男里遺跡現地説明会資料

発行 (財)大阪府文化財調査研究センター
 〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号 TEL 0722(99)8791

発行日 2001年2月24日
 印刷 株式会社中島弘文堂印刷所